

其角年譜試稿 (七)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今泉, 準一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12225

其角年譜試稿(七)

今泉 準 一

秋

- ×七月七日 泥足、其角亭訪問、長崎の話、紫紅を加えて、三吟歌仙(『其便』「唐人か」の巻)。注九五。
 - ×七月二十五日 深川榮寿院において、嵐雪・介我・神叔と四吟歌仙(『句兄弟』「つくり木の」の巻)。
 - ×八月一日 寒玉・桂花・紫紅と四吟二十二句(『句兄弟』「初鮭は」の巻)。
 - 八月五日 其角編著『句兄弟』の序成る。号晋子。
 - 九月六日より以前のある日 介我・泥足と三吟第三まで(『其便』「波動く」の巻)。
 - 秋のある日 泥足編『其便』の序文を認む。
 - 九月六日 江戸を発つ。上京の旅へ。同行者、岩翁・亀翁の父子。横几・尺草・松翁(『句兄弟』)。
 - 九月九日 三島(『句兄弟』)。
- 駕に濡れて山路の菊を三嶋哉
- △右の句を立句に江戸の俳人たち、介我・泥足・一颯・紫紅・湖夕・桃隣・一境による表八句(『其便』)。

○九月初旬 芭蕉伊賀にあつて、其角の句「白雲に」について支考と語るか。注九六。

○九月十二日 掛川より秋葉山に入る。秋葉権現参詣後、天竜川を下り、浜松へ（『句兄弟』）。

○九月十六日 桑名。これより伊勢へ（『句兄弟』）。

○九月十七日付 此筋・千川（推定）宛芭蕉書簡に、「続猿蓑下清書ニ懸候（かかひ）。殊之外其角・嵐雪・桃隣家ノ集をかゝへて最中とんぢやくの折節、少（すこ）づあや出来そうにて物むつかしく候故、愚意を加へ候事ハふかくかくし申候」〔校本芭蕉全集〕「書簡篇」云々と、其角の場合は『句兄弟』をさすのであろうが、『続猿蓑』編集に関連して其角その他の江戸作家のことに触れている。

○九月二十日 外宮・内宮参拝後、太々神楽見学（『句兄弟』）。

○九月二十一日 二見・朝熊（『句兄弟』）。

○九月二十三日 田丸。長谷路を通過して長谷へ。長谷・三輪・石上・奈良へ。

○九月二十八日 奈良を立ち、

○九月二十九日 吉野（『句兄弟』）。

○九月跋 嵐雪編『或時集』発句二入集。資料篇一〇九。

冬

○十月二日 高野山。これより紀川を下り、和歌浦・吹上・吹井へ（『句兄弟』）。

○十月九日か十日か 芭蕉が（であろう）、乙州に、其角が和泉の府淡の輪あたりに来ていることを尋ね、手紙を出す。

この手紙、行き違いとなり、其角は岩翁・亀翁と船で吹井の浦を見物、さらに船で

○十月十日 堺泊（『枯尾華』「芭蕉翁終焉記」）。

○十月十一日 大坂着。芭蕉の病の報に「胸さはぎ」、一行と別れて病床に参す（『枯尾華』「芭蕉翁終焉記」）。

○十月十二日 芭蕉没す。枕頭にあるもの、其角を加えて、去来・丈草・支考・惟然・正秀・木節・乙州・之道・吞舟・舎羅・次郎兵衛、その日、夜舟にて遺骸を義仲寺へ。

○十月十三日 義仲寺着（『芭蕉翁追善日記』他）。

○十月十四日 埋葬。其角ら義仲寺に籠る。

○十月十六日 曲翠と幻住庵を訪ね、生前を偲ぶ（『枯尾華』）。

○十月十八日 初七忌。追善俳諧。

なきからを笠に隠すや枯尾花 晋子

右を発句に、百韻興行。連衆、其角・支考・丈草・惟然・木節・李由・之道・去来・曲翠・正秀・臥高・泥足・乙州・芝柏・昌房・探芝・胡故・牝玄・游刀・蘇葉・智月・吞舟・土芳・卓袋・靈椿・野童・素馨・万里・譏々・這萃・許六・回覧・荒雀・楚江・野明・風国・木枝・角上・尚白・丹野・朴吹・魚光。（『枯尾華』）

○『芭蕉翁終焉記』を、芭蕉の位牌の下にあつて、草す。号晋子。（『枯尾華』）。

○十月十九日 之道・芝栢（栢）を誘ないて上京。諸方の通音をかしこに待つへき故なり（『芭蕉翁追善之日記』）。

○十月二十三日 其角の留守宅にて、芭蕉の訃音に接し、江戸蕉門らによって追悼歌仙一卷。連衆、仙化・是吉・介我・柴零・湖月・神叔・揚水・枳風・由之・全峰・沾徳・李下。なお、この前日、嵐雪らの、また桃隣らの追悼歌仙。二十三日に、湖春・素龍・露沾の第三までに、さらに杉風らによっての追悼歌仙があつた（『枯尾華』）。

○十月二十九日 素堂は曾良に其角が大坂にいる由を連絡する（森川「めづらしや」歌仙草稿、素堂書簡）『連歌俳諧研究』第三十八号）。

○十一月十二日 芭蕉初月忌。十月二十五日江戸を立ち、十一月七日夜、義仲寺芭蕉の墓前に参じた嵐雪・桃隣とともに丸山量阿弥亭にて追善百韻興行。連衆、嵐雪・桃隣・岩翁・晋子・亀翁・横几・尺草・松翁・去来・正秀・曲翠・筆・轍士・心圭・暮四・巨海・荷兮・野童・風国・集加・重勝・遅望。〔枯尾華〕

○十一月十三日 其角・嵐雪・桃隣と三人で、去来の落柿舎を訪ね、鉢たたきを聞き、芭蕉の往時を偲ぶ。〔となみ山〕。

○十一月十四日 一夜明けて、四人伴れ立って北野神社に参詣。〔となみ山〕。

○この前後 嵐雪・去来・桃隣と四吟十句。〔となみ山〕「こからしや」の巻。

○同じころ 去来と両吟歌仙。〔華実集〕「千鳥たつ」の巻。

□このころ 嵐雪・浪化・夕鳥・芦風・芦翠・芦葉ら井波連衆の句に批点を施すか（井波町立図書館蔵「真蹟点巻」）。

○十一月 浪化宛去来書簡に、芭蕉の伊賀出發からその死去までを報じ、「其角も從_レ泉州二十一日ノ夜参着、生前の対面を逐候_トキ」と述べ、芭蕉の傍にあつての去来・丈草の発句を書き、「右、病中以来臨終追悼の句共、文章を添て『枯尾華』と号シ、キ角終焉記を書て、追付出版に及_レ申候」とある（飯田『蕉門俳人書簡集』）。

○十一月奥付 支考編『芭蕉翁追善之日記』発句一、他入集。資料篇一一〇。

○この冬 去来の雪の門の句を題に、其角、許六に一句を望む。〔韻塞〕。

去来か雪の門を題にすえて

晋子に句を望まれける時

十四屋は海手に寒し雪の門 許六

○同 集加の招請で、新川原町橋屋で半歌仙。連衆、其角・集加・我黒・泥足・轍士・鞭石・金毛。〔海音集〕「鯨洗ふ」の巻。

○同 別の日、同じ橋屋で歌仙一卷。連衆、其角・金毛・信徳・雨伯・長丸・集加・轍士・泥足〔『海音集』「静かさや」の巻〕。この歌仙中、「菊さけてやり手かひとり寺参り」の其角の付句を信徳感ず〔『海音集』〕。注九七。

○この前後 金毛宛其角書簡。注九八。資料篇一一一。

△このころか轍士編『いと屑』に序文を与う〔『いと屑』〕。

○『枯尾華』『句兄弟』を京にて編集。

○泥足の『其便』の板下を認む。

○冬 京を発ち、江戸へ帰る。

○十一月十九日夜 熱田にて表八句。其角・鷗白・露川・湘水・左次・梅人・素覧・野幽〔『やはき堤』「宵の帆を」の巻〕。〔『俳諧種扇録』〕。注九九。

○十二月 宇津の山を過ぐ。

置捨に笈の小文やとしのくれ

〔『続有磯海』〕

○この年刊 『句兄弟』序文・俳論三九章・発句八・連句一〇入集。号晋子。

○同 『枯尾華』文一・百韻二・発句三入集。

○同 泥足編『其便』発句二八・歌仙三・表八句一入集。資料篇一二二。

○同 轍士編『いと屑』序文入集。資料篇一一三。

○同 荷兮編『ひるねの種』発句一入集。資料篇一一四。

○この年成 許六編『旅館日記』発句二〇、三ッ物五入集。注一〇〇。資料篇一一五。

○同 心桂編『名月集』発句八入集。資料篇一一六。

元禄八年（一六九五）乙亥 三十五歳

春〇はつ夢やひたひにあてし扇より 江戸 其角

（『近世文芸資料と考証』I、「西日本俳諧資料散歩」）

○一月二十三日 芭蕉百日忌追善。

翁百ヶ日懐旧

墨の梅はるやむかしの昔かな（『後の旅集』）

右を発句に、桃隣・嵐雪・林巴・介我・仙化・紫紅・枳風、歌仙一卷（『後の旅集』）。

○同日 千川発句、脇桃隣、第三其角にて、芭蕉百日忌歌仙一卷。其角は第三の一句のみ（『後の旅集』「青柳に」の巻）。

○『後の旅集』成る。資料篇一一七。

○春のはじめのころ 「となみ山の引」の一文を草し、浪化編『有磯海・となみ山』の発刊を祝す（『有磯海・となみ山』。注一〇一）。

○一月二十九日付 許六宛去来書簡に、其角の作品についての去来の感想が述べられている。資料篇一一八。

○二月序 文車編『花蔭』発句三入集。資料篇一一九。

○三月四日 江戸入りの支考とともに、桃隣・介我を伴い、上野へ花見。暮れて柴葺亭へ（『笈日記』）。

△内藤露沾（義英）、奥州岩城平へ隠退。「はま弓や当時紅裏四天王」の句を贈る（『蕉影余韻』他）。注一〇二。資料篇

一一〇。

○三月上旬刊 浪化編『有磯海・となみ山』文二、発句二一、連句二一入集。資料篇二二三。

夏×五月 如流・里圃・其角・亦蕉・雲洞・額之・夕圃・沾圃・執筆の半歌仙(『翁草』「長刀は」の巻)。

○六月序 睡闇編『やはき堤』発句五、表八句一入集。資料篇一二二。

○八月十五日刊記 支考編『笈日記』発句五、連句一入集。資料篇一二三。

冬○十月十二日 芭蕉一周忌を修す。

深川長慶寺に往事をおもふ

しくるゝや爰も舟路を墓参り キ角 (『若菜集』)

右を発句に、其角・沾徳・堤亭・紫紅・彫棠・介我・山川の歌仙一卷(『末若葉』)。

○十月十二日成 嵐雪編『若菜集』発句一入集。資料篇一二四。

○十月 「如行宛」其角書簡、芭蕉一周忌を迎えての江戸蕉門の動向、また三回忌に対しての其角の気持などが述べられている。なお、これによれば三回忌は木曾塚で修めつもりであったようである。資料篇二二五。

○十月序 和海編『鳥羽蓮華』発句一入集。資料篇一二六。

○十月十二日以降のある日 闇指宛其角書簡。資料篇一二七。

△この年か、あるいは九年・十年 其角結婚。注一〇三。

○この年序 東潮編『渡鳥』発句一入集。資料篇一二八。

○この年成 友琴編『八重葎』発句一入集。資料篇一二九。

○同 青流編『住吉物語』発句一入集。資料篇一三〇。

○この年成るか 浪化編『随門記』其角の句の評、また其角評あり。資料篇一三一。

注九五 『其便』には

晋子家にて一日

崎江の物かたりして

唐人か風いのる也星まつり 泥足

とあり、これを発句に三吟歌仙が載る。「星まつり」とあるので、七月七日の項においた。また崎江は長崎をいうのであろう。

注九六 支考の『十論爲弁抄』『第八段』に「一とせ伊賀の西麓庵におはして、統猿蓑の撰集ありしに、武城の人くより発句をおくれり。其中に其角も三四章ありて」とあり、其角の発句についての芭蕉の論評が載る。ただし、其角の発句「白雲に」の下五文字が誤って記載され、またその誤りに基づいての解釈が載り、従ってこれに基づく芭蕉の論評にも疑義があるが、これに近い事実があったであろう推測は可能である。

注九七 このときの歌仙の発句「静さや二冬馴て京の夜」の「二冬」その他から、『みよな草』・晋風編「其角年譜」(『其角全集』所収)とも、其角、京にて越年、翌元禄八年十一月江戸に帰る、としているが、この句は、元禄元年の京での信徳との出会いも冬、そしてこの度も、の意にもとれる句である。元禄八年春、江戸在の句文があり、第二回上京のときと同じ理由から年内江戸帰着とする。

注九八 前々項・前項の橋屋での俳諧に金毛も参加、またこの書簡に載る句が冬、また書簡中に「昨夜参上」とあり、このような交際のあり得たのはこのときが最も妥当と思われるのでここに置く。『俳文芸の研究』所収、今泉「其角書簡三通」参照。なお、同書では、発句「冬の梅春を舍し笑顔哉」と読んで発表したが、その後「含し」と訂正したことを付記する。

注九九 『俳諧種扇録』(綿屋文庫写本)に、「晋子真蹟」とあって、『やはき堤』の表八句が載り、最後に、「(マ)戊十一月十九日夜吟也 高柳丁寿所蔵」とある。なお、表八句は『やはき堤』には、「熱田にしろ人ありて此面を状に書入てこしぬ幸として追加ス」とあって、表八句が載り、その内容は、最後の句の「暮」が、『俳諧種扇録』では「空」となっている以外は、「衝」が「千鳥」となっているような表記上の相違が見られるだけのものである。従って『俳諧種扇録』の記載は信用してよいと思われる。「戊」は「戊」の記載上の誤りと考えられるから、この年十一月十九日夜、熱田泊とすれば、次項の十二月宇津の山通過の句もこの年のこと以外に考えられないので、この年の江戸への帰途は熱田の知人訪問等、急ぎ旅ではなかったことが知られる。

注一〇〇 『旅館日記』については、注七一で述べた『芭蕉研究』第二輯、「芭蕉と許六」によれば

もと表紙にも「元禄五壬申秋七月」と記されてある如く、本書は元禄五年七月許六東下の際、客中折々の吟を採録して旬日記となす為に起稿されたものであったが、その秋の末か冬の初の比、東武の客舎に閑に旅懐をやるかたはら一つには旧作を回顧し一つに

は今後の作句の参考にも資する為、この秋以前に成った句を予め立てた冬以後の部立の初めに記して置き、更にその冬の半はこの度江戸に下って新たに入手するを得た「一字幽蘭集」の中から己の作句の指針ともなり又己が日記をして更に多彩ならしむる様な句を各季に五句宛撰んで記入して置いた。そしてその上に折々の自句或は師友の句を録し加へて行ったと云ふ如き順序に成ったものであらうと私は考へる。(略)そして右の如き句の奥に更に各部立毎に「戌」として収められてゐるものは甲戌、即ち元禄七年の句を右の余白に加へたものではないだらうか。

とある。

注一〇一 「刀奈美山引」の結びに「元禄猪頭勇進之日」とあり、『古典俳文学大系』注に「猪頭は豚の頭。中国に、正月にこれを福神に供えて祭る風習があり、また福神の祭礼日は毎月二十六日であるから、本文は正月二十六日の意か」とあり、とすればこの文の草せられた日は正月二十六日となる。ただ、「猪頭」は元禄八年が亥年であるから、亥年の年頭の意に用い、芭蕉没後の心を新たに、年あたかも亥、猪のように勇進すべき日、としゃれたともとれる。晋其角『易経』・狂而堂『論語』など同じ趣旨での号で、この種のしゃれば其角によく見られる。従つてこれも亥年の初めの意にとつていいのではないか。

注一〇二 『類柑子』下巻の「晋子終焉記」中の露沾の追悼吟が残る。

かの除夜の鳴門のさはかしさもほとなく世は春なれやと紅裏四天王の吟今さら思ひ出て

泪かな左の耳はよふことり 露沾

この句は前書から見て、「はまき弓や当時紅裏四天王」の句と「節季候は左の耳になるとかな」(『五元集拾遺』)の二つの其角の句を踏んでいることが知られる。露沾は、岩城平城主内藤義概(風虎)の次男として明暦元年出生。長子義邦早世のため、寛文十年後嗣と決定。十二年後の天和二年、疾の故に後嗣を弟義孝(露江)に譲る。退身後、麻布六本木に居住、元禄八年江戸を去り、磐城平に移る(『俳句講座』、岡田利兵衛「内藤風虎・内藤露沾」)、『末若葉』に

岩城へ赴くとき

桜川我も曲見の水かゝみ 露沾

の句があり、三月ごろ岩城に退隠か。資料篇一一〇に載せた其角書簡に「是は私へ御恩被下候方へきけん取也」とあるのは、露沾の其角への悼句の前書で露沾をさしたものであらうことがわかるが、一方、露沾は藩内の事情から疾と称して後嗣を譲るようなことがあり、またさらに何らかの事情から江戸を去って、磐城平へ移ることになり、上述の其角の二句がこのときに贈られたとすれば最も自然と思われるので、かりにここに置く。因みに、元禄八年、大久保もくのかみ(大久保忠朝)六十四歳、牧野備後のかみ(牧野成貞)

六十二歳、井上つしまのかみ(井戸良弘)六十一歳、下条長兵衛(片桐信隆)七十一歳。参考までに、其角の二句を、露沾の悼句の、前書を参照にして試解を述べると、「節季候は」の句は、節季を伝える節季候が一方(左の耳)ではさわがしく鳴門の波のように聞えてきますが、ほどなく世の春となりましよう、ぐらいの意となるう。「はま弓や」の句は、当時はここでは現在の意、紅裏御免の四天王も健在、邪を払う「破魔弓」を飾って新年を迎えることであるよ、と世はさわがしいが、邪は払われて春となる、と今年こそと、露沾の前途の光明を祝って暗に激励の意を込めた句であろう。

注一〇三　ここで其角の結婚について簡単に述べておきたい。これについては志田義秀氏の「其角の娘(昭和二十二年刊『芭蕉前後』所載)と題しての詳細な考証のもとになる論考がある。いまその要旨を述べると、『其角一周忌』(淡々編・宝永五年成)の中にある沾洲の其角追善句の前書によって其角に三人の娘があったことが知られること、しかもこの中の一人はさちと名づける娘であり、これは其角没後も生存していたこと、また一人は其角の「ひなひく鳥」(『類柑子』所載)と題する一文によって、「三輪(みわ)」と名づける娘でありこれは其角よりさきに没したこと、この外に上述の沾洲の句の前書に「不通にやりたる」とある恐らくは縁を切つて他人の子としたであろうと想像される子どもがあったということ、『焦尾琴』の午叙の後叙から元禄十一年十二月十日の火災事にすでに妻子があつたと知られること、これは「傀儡の鼓うつなる華見哉」(『焦尾琴』『五元集』)なる其角の句の前書に妻奴の語があることによつても裏づけられること、「初雪や十に成子の酒のかん」(『五元集』)の句によりこれがさちと推定されるが、これによつてさちの誕生の年を決定する資料にはなり得ず、一つの可能性を見る資料となるだけのものであること、其角の「あかつき傘」(『類柑子』所載)と題する一文に「妻なく子なかりし時の楽」(『五元集』)とあつて三句が載り、これらから考えてまだ子どものなかつた時期は遅く考えれば元禄八年(事によれば九年)であり得ること、これから考えてさちの誕生はおおよそ元禄九年か十年と考えられること、「北の窓」(『類柑子』所載)と題する一文および上述の「ひなひく鳥」の文から妹の三輪は元禄十四年誕生と考えられること、「宝永三」云々の前書に「妙身童女を葬りて」とあつて「霜の鶴土にふとも被されず」(『五元集』)の句からこの三輪は宝永三年十月二十二日没、六歳、戒名妙身童女と知られること、がその概要である。上述のように詳細を極めた論考であるが、この論考の中でただ「子もふまず枕もふまず時鳥」(『韻塞』他)の句を独身時代の句と「思われる」としている点が問題になる。もちろん独身時代の句と考えることもできるけれどもまたまったく同じ可能性をもつて結婚後の句と考えることもできる。従つて、さちの誕生をおおよそ元禄九年か十年とされる結論の「おおよそ」の語には一層のアクセントを置く必要があるといふことがいえる。といふのはこの「子もふまず」の句は元禄九年夏以前の句と考えられるものであり、場合によつては八年成立も考えられるからである。同様のことは下限にもいえる。さちの誕生を元禄十一年と考へても氏の挙げる全資料に矛盾が生じないからである。従つてこれを一層明確に述べるとするならば、其角の迎妻・孝尼は元禄十一年十二月十日以前であること、の一点にとどめるべきであろう。なお、其角の句に、「愛娘子」と

前書のある「鶏啼て玉子吸蚊はなかりけり」(『五元集』)、および「祝座育」と前書のある「たかうなの皮に臍の緒包みけり」(『焦尾琴』、『五元集拾遺』)があるが、後者は『焦尾琴』に載る句なので、あるいは長女の「さち」、前者を年代不明のゆえに「三輪」と考へることもできるかも知れないが、しかし、これももちろん決定できない。ただ、元禄十四年三輪誕生は動かぬものとしてよいであらう。

資料篇

一〇八 『七車集』

日をまてや幾日五月雨鈍り節
 嘯あましたる筈の骨
 船頭に網も下着も運せて
 人さへすくむ鷺の水影
 此月に留守遣ふとも問返せ
 跡もぬれざる大風の露
 ヲ
 犬はしる上は動かぬ稲莖
 樹神は呼に遠き井の声
 棒鼻と見えて老たる男ふり
 火を消ス迄はすくむ賊
 一ト房を引はかたむく小豆角垣
 照る日に匂ふ胴仏の膝
 胸札の乞食の手とはおもはれず
 むかしの秋を物毎に泣
 追分を直クに伏見のきぬた聞
 車に疊誰か宿の月
 花の陰筋引廻す土舞台

其角 轍士 霑徳 其角 轍士 其角 轍士 霑徳 其角 轍士 其角 轍士 霑徳 其角 轍士

名 護摩の衣に覆ふ燕

かけるふの蝶とも見えす公家の紋

ころにほるゝ人は中古

行灯をかき立てなから恨言

三里の灸の毛をはさむ也

大晦扇一本用意なき

屋鋪の酒にこまる町人

落さうな欄干に出て昏の海

わざと喰せて殺す蚊の色

不細工は楊枝削るにみえにけり

女房の頬を撫る仇癖

借りて来るちらしの服胸あわす

月は煙に曇る麦蔭

ウ

九折坊の勝手を見さかして

岩にもさはる隨身の太刀

鱒ねとも水の遊きや魚の魂

舟に飼るゝ猫の気疎き

御祓も売切る与謝の花の時

春をうけおおう京の案内

轍士

仙化

素子

其角

霑徳

其角

轍士

霑徳

其角

轍士

霑徳

其角

轍士

霑徳

其角

轍士

霑徳

其角

霑徳

其角

轍士

其角

霑徳

轍士

昼寝する身の程軽し旅衣
 大小刀はなにもかも切ル
 落ちつかぬ岡の莖の片下り
 杖にやとるさまくの草
 給分は芽から出す渡し守
 鷹のやうなる風呂好の肌
 珍しき呑み手なりけり七十余
 片顔に仕てかゝる鬼面
 木を負て梯渡る霧の息
 落る所を鎰釣の鮎
 羽一つもぎる蜻蛉は傾きて
 談義に起す椽側の月
 綿とりて寄麗にみゆる薄額
 仇なる方をたむる伽羅挽
 年くの太刀折紙の埋れて
 母の利口に家老つとむる
 海陸の二百里吹や花の風
 鯛はかう切レ柳やまふき
 名
 朝霞支度にかゝるゆふたすき
 ゆき尺さして返す着物
 籠りある旅の黒みの直る迄
 樽を済して恋を落着
 いつの代に忘八の数を極めけん
 松は有やと袋井を問

百里
 氷花
 穹風
 湖月
 神叔
 介我
 仙化
 轍士
 其角
 百里
 湖月
 穹風
 介我
 素イ
 氷花
 神叔
 湖月
 其角
 百里
 仙花
 轍士
 氷花
 穹風
 其角

左にて鷹をつかふも勝手也

蕎麦かき喰ふて発る霜腹

ともし火に見台計向て置

ほむれは猫の舩放さす

湯あかりに知らぬ人をも咄させて

前歯つれなき笛吹か年

廻廊にくれの月待敵島

鳴しつまりて風の鯛

道すから帯して帰る相撲取

お守の賺す駕の中

藁葺を引倒したる煤柱

島に交る勝尾寺の櫻相

瑕もなく割れずに残ル昔碗

朝起すれば心まめなる

札売の下は花ちる水の魚

あかす弥生を逗留の人

行脚の轍士見ぬさきより年と

ともなるへき事をおもひやりて

露沾公

いつ老て星に指折郭公

茂みの風のたゞく灯袋

序にかへす鞠の静めの鷹揚に

かりあふ櫛を戴る鼻紙

水重く擔桶のはねたる大盥

介我

素イ

神叔

湖月

穹風

介我

仙花

轍士

百里

神叔

轍士

介我

氷花

素イ

其角

執筆

露沾公

轍士

其角

介我

沾荷

階子を引けは窓からの月

是もとを求食も艶し蕎麦の雉

箕にはす綿の纒露けき

在家にも寺にもあらず社人町

和に見はらす房州の山

今朝の鯛いまた赤みもなかりけり

風引声のけしきたつ冬

単おろす坐禅の姿定りて

深き荊を猪の胸分

浮雲に峠の岩隔つらん

ふねに向ふて草履提寄ル

案の条いなせた妻を思ひ兼

御旅を祈る夏の宵月

水乞て乗物居る一里塚

ちいさき本は見よき懐

散はなを院の者共おとろきて

畦すき通る百菊の苗

跡先に笄橋を帰る雁

赤木の神を見こむ愛首

日は入と捨るも惜き腰の笠

寝かほは夢の庄子ならまし

琴の緒のしめ力なき仇心

恋をしれとて膳を居来る

柄君の情に海を忘れけり

筆には堅き青螺の軸

言荷

秋帆

執筆

轍士

露沾

介我

其角

言荷

沾荷

秋帆

轍士

其角

沾荷

露沾

介我

沾荷

秋帆

其角

露沾

轍士

言荷

介我

沾荷

其角

轍士

抱籠にしはしもたるゝ袖輕し

朝の機嫌と替る猷立

原沼津広き所を晴々と

髪鹹て頭巾塩しむ

思ふ帆て月に出たかるかゝり船

御堂に障る松の夕霧

鴨の額けはたつ秋の雨

はなれて跡を帰る牛の子

傳奏の下向を触る々宿はつれ

屋根を突ぬく花の枝ふり

春の風顔からしてか上戸也

世を轟かす説法の弁

生松にくさめ／＼といふされて

人さま／＼に旅のましはり

露沾

秋帆

介我

其角

轍士

露沾

沾荷

秋帆

露沾

轍士

介我

其角

秋帆

言荷

尻居よとて

嵐雪

根のつくやさき／＼へ飛ぶ石荷

木立の茂み分／＼の顔

塩焼に鱈の骨を好むらん

二間の鍵の余る小座鋪

ひしやけたる鞠に篠打暮の月

蛙の鼻に秋の玉水

背戸の山かぶさるやうに葛かつら

門前町は何をすきはひ

黒髪ははへても形は比丘尼也

湖月

柴牽

氷花

其角

介我

神叔

百里

轍士

言荷

梔子染の硯箱文

昼風を削る柱に腰掛て

芝居の疊たれか請ける

此雪に大晦日の来るやらん

日本橋を日本の月

秋風に裾のまかれて墨衣

蕙の峽をやとふ尻押

敗軍を打崩されて花の雲

沼一筋に雉の足跡

名
村／＼に青み出たる春の富士

数とる串をくはる鐘撞

花摘の曙雲る美人草

行方問へるけふの傾城

庇より酒の雫はたか命

堺鈍の所ちいさき

金紙の筆に似合ぬ名也けり

分限者の子か天台の沙弥

源氏の間月の光も水の面

万の虫の飛出て啼

侍苦し柞の紅葉暮かゝり

一度も元を見せぬ嗜み

ウ
帯提て二階を下る独言

わるい相手をきよくる猿楽

忘ては精進落るかすていら

今宵の寝番広間四人

嵐雪

轍士

百里

神叔

其角

介我

湖月

柴骨

神叔

百里

氷花

其角

轍士

嵐雪

介我

湖月

柴骨

氷花

百里

神叔

湖月

轍士

氷花

介我

嵐雪

花折レは下からはやす投所
是風翁と几巾に響す

橋行は長刀売に似合たり

一日つふす五月雨の空

荒筵灸にたかる蠅追て

酒に酔ふては猿もねむかる

明り増す月になりけり矢代的

草履をしかる草村の露

風そしむ僧尼の拜のよ所なから

石にかくれて盗ミ小便

宵の髪眺かたはくる／＼と

車のわかれ牛もつれなき

水飲を蹴上の水にすゞきあげ

早爪のこふかたひらの袖

朝毎に表屋の裏戸扣キあげ

毛をこほしたる鶴のほころひ

霜寒る月より落る船のせみ

和尚も出て木を荷ふなり

椎一本山と見なして花の里

春の羽織に着たき麦嶋

五房を五人の主の牡丹かな

扇見分る夕暮の色

櫓の足の蜈のやうに揃来て

其角
柴零

柴零

其角

轍士

神叔

菟株

柴零

其角

轍士

神叔

菟株

轍士

柴零

菟株

其角

柴零

神叔

其角

轍士

氷花

轍士

嵐雪

宿／＼にあり大名の松

猷立は去年の通りけふの月

羽織をせつく此比の冷

業平といはるゝ馬士の稲莖

わりなき恋を山臥の掣

赤う成鏡の影にふかされて

浴衣にうつる鳶の羽虱

懸渡す黒部の橋や海の上

臺なくて弱る病人

天井の煤のちらつく片白

筆草臥て絵の具まきるゝ

前銀を都女の品さため

抱付なから教えたる琴

月華を庵香炉に立煙

枝から葉から野桃いやしき

春毎に神垣しむる副鳥居

水口ひらく永楽の棹

更ルほとこはひ咄にしこりけり

愚癡に延たる眉の降魔毛

穴の有石を繋て祈らむ

家買ふてやる人の相口

酒がよし肴の自由山の内

姫と呼ばれて太る蛇

臭葉の匂ひも霜に枯渡

門は高くて玄関見下ス

介我

其角

湖月

執筆

氷花

介我

其角

轍士

嵐雪

湖月

介我

其角

轍士

嵐雪

湖月

氷花

其角

轍士

介我

嵐雪

氷花

湖月

轍士

介我

湖月

ほの／＼と明行月に兒青し
こゝろをしれよ櫛の露

中間から声を相撲のうしろたて

つくだ大和田の旅の釣人

塩風に軒も仮りなる紙熾

何に常山の虫壳に来る

四季ともに大根絶ぬ花の国府

藪に見こして梅盛也

園めくって野菜心にまかせたり

夏草や爰に有へし薬師堂

蓑着た人に似たる竹の子

早川に矢を負ふ魚の淀むらん

草履がけにて馬買の旅

厚綿の引立られぬ月寒し

枕嫌いの投る木まくら

踞ふて酒を戴く庭作リ

女の脚の見ゆる暖簾

裁付を引ずりながら憂別れ

鮮をわすれぬ越の今庄

蓋のなき挟箱もつ御師の供

小遣ひ銭に崩す丁銀

寝ぬ顔や焼場帰りのひよろ／＼と

岡へ齧のあかる秋雨

其角

嵐雪

轍士

其角

氷花

嵐雪

介我

轍士

専吟

尺草

琴風

其角

轍士

琴風

尺草

専吟

轍士

尺草

琴風

其角

専吟

冷入て孫に疝氣を踏せけり

隣へ配る月の味噌大豆

花に散よしのゝ町の片下り

名 氣きまゝ頭巾の春の交加

若党の見事舟漕一かすみ

魚よりさきにあふき消す炭

草庵にとこから降りし米俵

髭にて顔のしれぬ白雪

ちらはらと帰り花咲山の原

膝に埃の溜る木地引

頂ぐら巻に菖蒲する子のなまり哉

中間のもつ文と紫陽

ゆく水に鮎桶ふせて重ぬらん

川てかならず牛の小便

見晴しに咳をせきたる月の前

算シヤヘの墨のひやゝかな跡

村紅葉折マらるゝ程は延ヒあがり

此海道におほき猿牽

扇ウにて富士は都に登りけり

岩を住居て竹の灯

空に我か銘を覚えし鐘の声

酒にかたさを崩す人中

臆病な掛乞帰る年明て

尾を指す馬の進む春風

轍士

尺草

琴風

其角

専吟

轍士

其角

琴風

尺草

専吟

轍士

沾徳

尺草

其角

東潮

介我

横几

子堂

筆

轍士

沾徳

尺草

其角

東潮

潮迄花の匂ひの濟海寺
 打あます地を構フ草萌
 我馬の幾日帰らぬ村雀
 病つく枕月やまきるゝ
 まざくゝと住吉を夢に秋の声
 妾かおとりは下手分に成ル
 前渡り古門前は寂てげり
 柀名落るしら雪の中
 汁碗をおりへに移す酒の興
 若き家老は出ぬ興副
 縁起とて町絵も土佐の名に成りて
 生木の白の見ゆる一山
 気をつむる占の柏の行流レ
 錢掘土の露も錆けり
 寝て起し座頭か秋の旅つかれ
 帳の流人よ折ふしの盆
 雨の月釘貫朽て門傾カシヅ
 蛇鳩を巻か喰ふか
 挙り行女中の笠のすれ合て
 其夕顔の恋の碑
 さまくゝの木の葉を取て菓子ウの形
 畳を踏ぬ輦の猫
 鳥の毛を枕に巻て老の夢
 槻と見せて杉の硯屏
 傾城の国を二度目にとい落す

介我 横几 子堂 轍士 其角 沾徳 尺草 東潮 横几 介我 沾徳 横几 尺草 東潮 轍士 其角 東潮 尺草 沾徳 轍士 介我 其角 東潮 尺草 沾徳 轍士 介我 其角 尺草 轍士 尺草

おもひなき音を岡崎の笛
拜殿を碁打所に涼しくて
次第に疵を見出す下馬^{シタ}
田の中の築波は晴ル花の雲
頭陀の古ひや所々の春雨

垣卑ふして四方遠し嗚呼閑居

蚊屋出さて吹ぬかれたる住居哉
藤の嫩のかゝる水棚

朝の事忘るゝ程の日に成りて

鳴うくひずに泊呼ふ月

春雨やまた頼母しき樽の音

芹つくり置堀捨の池

大きなる娘ひとりを持余し

袂にしのお長刀の伝

帆下に居れば繩のさはくり

煎し茶をまた出ぬ前に汲ほして

鬼も禿も豆に打るゝ

水鼻の硯に落る思ひなり

海津の納屋の浜の夕月

牛馬の眠かる顔の秋淋し

誰カ世の位牌露のおもかけ

八重／＼の大挑灯を花の一

蝶鳥に透々翠簾のとよめき

東潮
其角
沾徳
横几
介我

轍士

湖月
直方
尺草
其角
神叔
湖月
直方
轍士
神叔
其角
神叔
轍士
神叔
尺草
湖月
其角
轍士

名

侍の喰散したる雉子の骨

塩に焼出す山の井の水

帷子の上に掛けり草袴

篠押曲る草鹿の弓

白壁の堀は夜明のそは鳥

開柳たゞく月の山彦

秋寒き歩の提出る飯の札

木綿合羽につゝむ傘

油種伏見竹田を買集へ

老女の小歌昔はと聞く

手数寄とて料紙に伽羅をとめにけり

百色揃ふ生の浦貝

乱れつゝ衛の落す船の魚

袈裟をかふれば猶黒き僧

むら雨に十三越の闇くなり

穴かそへ置松の蜜蜂

天地の花の千苗や人の氏

矢数の堂をめくる春の日

水貝に葉付や撰む柚の苔

袷にしはし氈の居心

行鐘の鞘に家中を見覚て

巻れて汐に横川の船

月一夜目刺のうるむ朝煙

直方

湖月

神叔

直方

其角

尺草

轍士

神叔

湖月

其角

尺草

直方

其角

轍士

湖月

尺草

直方

神叔

岩翁

其角

轍士

横几

尺草

蓑所なり里の春雨

ウ 罎の図うつし植たり庭桜

ころふ小僧か肘尻の土

晒干す岡は寂しく飛鳥

笠も浄むか結ぶ無垢垢塩

うつろはぬ後家を男といひなして

白人もとす宵の拍子木

峯入の棧舗を渡す堀つゝき

小寒ふ成し秋の白雨

相宿の仕限をはつす暮の月

花売花の名を知らて済ム

羽二重の着心は尚春の色

節せふよりつかふ切箔の椀

名 つむ雪に井筒の道は是非もなし

狐を初に見たる傾城

袖書を風に取りられて思ふかな

三味線屋迄老も音を弾ク

半日は江口の里に船留て

縮緬雑魚に覆ふ夏草

水瓶に柄杓を捜す影寒し

客の出払ふ跡の暁

うつゝなや不断の数珠を置忘

伽羅を嚙たる口匂ひけり

真東に夜を待月のかゝる松

穂声の中に瀬戸の板橋

桑露

其角

岩翁

横几

轍士

桑露

尺草

其角

桑露

轍士

尺草

岩翁

横几

桑露

其角

轍士

岩翁

尺草

横几

其角

轍士

尺草

桑露

横几

岩翁

秋の風場打したる網の尋
隣郷までも見知る犬
看門に遊ひなからの団売
毛ふかき顔を洗ふ山水
散花や手に取蝦のはちくらん
梅も昼も匂ふさしかけ

駒形のあけほの

物おもふ船の早さやほととぎす
芦のあやめを分る岡釣
錆付る瓢に風や通ふらん
座鋪に置て秘蔵する駕籠
喰積に米はかりある十五夜の月
漸あたゝかに内に居る猫
朝東風に枉より煙ル袖香爐
躰のはなれぬ膳部なりけり
法師子の髪結とくれば櫛かりて
やしろの数を つゝむ散銭
頭なき蛇を踏越す草の原
小桶に植て苛の花待ッ
月暑し揉和る腹の張ッ
一まん句云フ左右の文台
板の間を誰か仕初て小便所
茶の乏しさに藤の葉を蒸す
是はかり盗ミ残せし花の宵

轍士

轍士
尺草
岩翁
横几
其角
桑露
百里
神叔
嵐雪
氷花
仙華
介我
其角
百里
轍士
嵐雪
神叔
仙華
氷花
轍士
介我
仙華

名 うくひすみんと山谷を過ル

春の水刷毛一盃に薄落て

瓶子の酒の匂と微けり

捨扶持に年寄斗哀也

面にはよらぬ心逸物

政所に公事聞て居ル客も有り

恋てかためし人の世中

布引に涼の床の前渡リ

器量かよさに許ス泥坊

身を投るやうに合セの絵を捨て

櫓のゆかむ炬燵寒ヶし

白無垢の袖口黒キ月の影

魂の迎に夫は上下

茶釜にて弾いた儘に顔の露

銭を含んで手へ戻る猿

昼船をおもひ留る油掛

大名にして軽き家造リ

辛子菜の広葉に溜る野の花

鰻より落る土の文鳥

明けはなす襖も風のかほり哉

釣瓶なからにこほす常夏

道均す鍬を一荷に束ぬらん

誰ひらきたる新浜の塩

上魚は口へのらさるけふの月

百里

其角

轍士

介我

神叔

氷花

嵐雪

百里

其角

轍士

仙華

神叔

氷花

嵐雪

神叔

介我

百里

氷花

仙華

亀翁

轍士

専吟

尺草

其角

四ツ五ツある箱植の柚子
 秋の暮中臣をくる加茂の祢宜
 猶秘藏なり綱付ぬ猿
 膳を取跡もたしなむ女客
 右をさゝやく人の瘡きず
 前錐の廻りせはしき教珠の粒
 山水落る溝の石菖
 居間にして庵の様子の困也
 赤土磨る雨の濡色
 初物も大かた出し花盛
 十里を歩に春の日帰り
 月高き薪の宵の棧鋪割
 太く見えぬる職人の指名
 ぬるき茶に奥の遠さを知られけり
 紙のへたての残る藁屑
 立かけて駕籠より余る柄頭
 祭文はやす山伏の親
 昼も夜も同じ衣の鉢扣
 鼠のついで甜る臼の目
 洗髪高くくまりて見落され
 縹子に成たる今やうの帯
 入相にくまり淋しき寺の門
 芦辺の月に檜綱うつ声
 引を見に奥に鯉の沙鱸
 いつ行ちかふ雁と蜻蛉

平砂 轍士 龜翁 尺草 專吟 平砂 其角 轍士 龜翁 其角 平砂 專吟 尺草 其角 轍士 龜翁 尺草 專吟 平砂 其角 轍士 龜翁 尺草 專吟 平砂

心から独揚屋の朝けしき 其角

按摩が隠す肌のよしあし 轍士

元服の当座は顔のほそやかに 平砂

居卜てあかぬ京なりけり 亀翁

出家して後は花見す酒吞す 尺草

一本でもつ池の青柳 専吟

(国文学研究資料館・頼原文庫)

一〇九 『或時集』

千人か手を欄干や橋涼ミ 其角

寝心やこたつ蒲団の醒ぬうち

(酒竹文庫)

一一〇 『芭蕉翁追善之日記』

十一日

(略)

其黄昏におよひて晋子ふと入きたる其声のおとろき聞へければ直に枕にめされて対語して退きぬ初夜の過るほとに又めして病の寒温
この道の癡興をしめやかに物語して其夜はよもすから伽に加り申されし此人は年少より阿叟にまつはりてその□感のむなしからざる
にや此度の不思議にあひ申されし

(略)

十八日

所願忌

なきからを笠に隠すや枯尾花 其角

湖南江北の門人おのゝ義仲寺に会してこの日の供養をまうく百韻あり爰に記さす

十九日

其角は之道芝栢をいさなひて出京す是は諸方の通音をかしこにまつへき故なり

(岡山大学国文学資料叢書八)

一一一 金毛宛其角書簡

尚々

冬籠の句は面白く承候併覽とめいかゝと存申候

昨夜は参上御馳走忝存候申入之悦の発句したゞめ上候御落手可被下候此梅花周東子より到来分与申候

冬の梅春を含し笑顔談

十九日

晋子

金毛様

梧下

〔俳文芸の研究〕今泉「其角書簡三通」

一一二 『其便』

(序文)

肥の前長崎のみなどは異国交易の大肆にして天竺の靈文唐土の詩今以こゝにとりつたへ無_レ価_レの宝_レ顆_レともてはやす事通事家の業として耳にもらさすこゝろにさとさすといふことなし亦和国より珍賞のもてあそひをうかゞふ事は本唐の人の余情まことに深しと聞えけりされは春秋いたつらならず月雪わたくしなれば此市間にはさまりて隠閑を求め和風の至情にあそふ人多しとかやその人は必中華の誹諧にうとくしてむかし宗因元順などか言捨しあとにかたまりて一向に古体といひけをされて風雅をつからうすらき侍れと心には廢さる人ありて有ふれし予か選集に眼をひらき心を寄ぬよりて今の芭蕉翁の門にのそめる句ともをとりあつめてそのたよりと名付て此道を興さんとおもひ侍るよし泥足か消息數々なりければしらぬ火のつくしまて行ずして誹風を及ほしぬへきよるこひを返状のはしに云やり侍るこれその便と名付たる編_レ序なるへしもし心あるから人ありてわかひのもともてあそひと舌_レ頭にかけてやはらけまししかは一_レ様_レ手_レせんより又たのしからずや三笠の山にいてし月かもと詠して王維義滿等かこころさしをやはらけしも誹諧におおては是其便成へし

元禄七年雁来南洲日

晋子序

木母寺に歌の会ありけふの月

晋子

松の雪鳶に氷柱のさかりけり

戸障子の音は雪也松の声

東叡山明鏡坊より花送られしに

文は跡に桜さし出す便哉

ちる花や足袋をへたつる足のうら

林中ニ不_レ売_レ薪と文_レ選_レに

せになくや山時鳥町外_レ

晋子家にて一日崎江の物かたりして

唐人か風いのる也星まつり

一葉を鉢にすゝく鯛

たか袴座頭に成て躍るらむ

国侍は国かたの秋

月更て十にたらずや籠枕

いつの菓子やら袋戸の内

昨けふゆるされて売初茄

しやぎりを打て乗出す舟

吉原にあだな娘はなかりけり

眠たい島も紅_{さき}にかゝやく

冬中は火燵はなれぬ大名気

使のものをほむる即点

立ッ迄は旅人雲る秋の空

さき芋_つからを軒に釣_ル比

夜半の月てこなが歌を聞_セはや

鼻の先にていとゝこかるゝ

花盛恋に暮たり楊枝店

泥足

紫紅

晋子

紅足

晋

紅足

晋

紅足

晋

紅足

晋

紅足

晋

紅足

晋

紅足

晋

春のこゝろや手のうづく金
蜺とる人を寒しや法の袖

十文やりて宮の案内

五六分に葉のつまりたる深緑

酒吹かぬる池の夕闇

毫てさへ孫に土産を思ひだす

曲池に灸を縫ものゝひま

結構な寝日といふたりけふの雨

建長寺からもらふ筍

家賃にて二人はくらす草の庵

手なみを咄す琴柱差役

背へかくる水に襲ゆる風呂の月

西瓜のしづく瀑きはつく

本堂に鯛ふかくこもる声

林の透てひろふ鶴の羽

さしわたし泊八十あり花の雲

永過た日を乗物に酔

被にて尻形かくす春の風

茶屋はいりする蝶の俳

青嵐定まる時や苗の色

道も経かたし皆栗の花

横筋に蛇籠の水を吹上て

鹿飛かたへ棒を投たり

角力とは耳にて見ゆる月夜さし

晋 紅 足 晋 紅 足 晋 紅 足 晋 紅 足 晋 紅 足 晋 紅 足 晋

嵐雪
泥足
柴牽
晋子
神叔

茄^{トウモロコシ}て甘みを付る石梨
 杳^{トウ}うたぬ跡足はかり爪^{ツメ}の音
 大名に逢^アよしはらの封疆^{トウキョウ}
 草茎^{クサノコ}のむすめは路次へ隠^カけり
 乞食^{コジキ}の中に朝寝する奴^{ヤク}
 雪深し落した金を踏分て
 寮^{シヤウ}の柚味噌^{ユウミソウ}に囲^カり裏取巻^{ウラキマキ}
 尺八^{シツパチ}を嘘^{ウソ}かと聞^キヶは意氣^{イキ}一種
 徐^スく風^{カゼ}の冷る麻足袋^{マアシタビ}
 湯あかりの鼻^{ハナ}のひかりもけふの月
 酔^ヨたおとりを後^{アト}からつく
 一^{ヒト}本^{ポン}てそこらあたりを花盛
 母^{ハハ}の作りし養父^{ヤウフ}入^イの眉^{メイ}
 燕^{ツバメ}汁^{ジュ}にひとりぬ覚^{サト}る朝^{アサ}かすみ
 猫^{ネコ}煩^{ワザワザ}ひて膝^{ヒザ}にすりつく
 荷^カ庭^{テイ}の小口^{コグチ}をかぐる騒^{ワザワザ}かしさ
 雪^{ユキ}隠^カにひて返答^{ヘンタウ}をうつ
 麦^{ムギ}を蒔^{マキ}跡^{アト}から雁^{ガン}にほられける
 水^{ミヅ}鼻^{ハナ}たれて通^トる侍^{サマ}
 鬘^{マツリ}に髭^{ヒゲ}の折^{オリ}れたる籠^{カゴ}の海老^{エビ}
 まだ宵^ヨの氣^キに更^シる名月^{ナツキ}
 菊^{キク}の花沼津^{ナヅ}の宿^{ヤド}もうつろひて
 秋^{アキ}ふる霜^{しも}を米^{コメ}の粉^{こな}の袖^{そで}
 盗^{ヌス}人の這^ハて出^デたる釜^{カマ}の下
 将棋^{ショウシ}の駒^{こま}や碁石^{いごいし}散^ちる庭^{にわ}

薯^カ刀^{トウ} 湖^{ウミ}月^{ツキ} 嵐^{アザ}雪^{ユキ} 泥^{ドロ}足^{アシ} 神^{カミ}叔^{シヤク} 晋^{シン}子^シ 柴^シ牽^{ケン} 薯^カ刀^{トウ} 湖^{ウミ}月^{ツキ} 嵐^{アザ}雪^{ユキ} 泥^{ドロ}足^{アシ} 神^{カミ}叔^{シヤク} 晋^{シン}子^シ 柴^シ牽^{ケン} 薯^カ刀^{トウ} 湖^{ウミ}月^{ツキ} 嵐^{アザ}雪^{ユキ} 泥^{ドロ}足^{アシ} 神^{カミ}叔^{シヤク} 晋^{シン}子^シ 柴^シ牽^{ケン} 薯^カ刀^{トウ} 湖^{ウミ}月^{ツキ} 嵐^{アザ}雪^{ユキ} 泥^{ドロ}足^{アシ} 神^{カミ}叔^{シヤク} 晋^{シン}子^シ 柴^シ牽^{ケン}

行灯に鳥をつきぬる針の跡
嚙ほと真の堅きかき餅
座禪する衾細目に明にけり
牡丹に雨のかゝる匂へり
筆勢は主馬に極る花の雲
屠蘇一献のあとの酒盛

旅行

鴛に濡て山路の菊を三嶋哉
月は硯にかゝる大樋
盤台シタイの肴は秋の色持て
をのゝ酔に足延す也
植込に分限としるゝ作り竹
雪見の亭に寒わたる浦
一息に跡なる鳥の追付て
町の戻は軽きから畚

晋子第三迄にて旅立けるを九月六日即興に跡を継ぬ

波動く方へ越したる柳哉
雀の跡の竹の鶯
屋根葺の階子ほしかる春雨に
行キも戻も問し物売り
水の音分れる程に月更る
角を背負て森くゝる鹿
撰待に踏あらしたる塀の内

泥足
嵐雪
薯刀
柴牽
晋子
泥足

晋子
介我
泥足
一諷
紫紅
湖夕
桃隣
一境

介我
泥足
晋子
桃隣
足
我
隣

相撲とりとて親子前髪
手かゝりのなき丸石は捨て有る
朔日汐につゐて入船
染れとも結足らさる帯の色
初瀬の舞は酒がさせけり
雨風も旅をしつけて苦にならず
崩れ次第や宮守の蔵
忍はせて夜着の袖より月を見る
恋の起りはちつとした事
繕ふは田舎片氣の花の馬場
聳が分なり春の縁日
四ツ晴に又淡雪の降り出して
着物脱んとうしろ向きたり
貝焼の輪の転まはる台所
みやこの人も恥る長崎
蚊の喰はぬ染も有けり舟の内
衣は暑しかたひらの上
談合もとつつをいつに済兼て
松と蘇鉄の間何間
落しなの狐に琴を望るゝ
見るに心も細る三ヶ月
秋は猶昔の妻の懐しや
文て根を巻水入の菊
むつかしきものとや猫の耳の穴
酔た時にはさゝぬ脇さし

足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足隣我足

川の瀬はあさく柱杖の濡てしる
横に雲雀の囀らぬ声

心なく散ける花に目をつけて
机に足を出す永き日

我 足 隣 執筆

兩國橋上吟

千人か手を欄干や橋すゝみ

并に舟中の吟

此人數船なればこそ涼み哉

野草の吟

野鼠の是を喰らん土筆

鶯に葉教ん声のあや

画菊の讚即座

菊白く蒼は後に書れたり

怨聞誰

傾城の小歌はかなし九月尽

常陸帯ならはしなとおもひあはせて

誰と誰か縁組すんて里神楽

冬川や筏の居る草の原

○世に天下老和尚の扇にたとへ示されしといふあり

いま其戒に思ひ合侍る

化也と花に五戒のさくら哉

折に殺生偷盜見るに邪

淫飲酒は本より申さずとも

○仏もし大晦日に入滅し給は

いかに仏とも貪着すへきかゝる

世話しなき衆生の為には往生もふのもの也

仏とは桜の花に月夜哉

上野にて

小坊主や松に隠れて山桜

横江舟中

白雲に鳥の遠さよ数は雁

雁の腹見すかず空や船の上

人麿講を結びて

沖の帆も十二三十や浜千とり

それよりして夜明鴉や蜀魂

巴峽の猿を

声かれて猿の齒白し峰の月

曉の氷雨をさそふやほととぎす

望帝我や鼠にひかれけん

五月雨や是にも外を通ル人

海へ降霰や空に浪の音

童にもしころ頭巾や煤掃

(竹冷文庫)

一一三 『いと屑』

(序文)

あつめて糸屑といへる書は此道に染ミけむ人の心を千すぢに分てかのをたまきなといふ俗書の紛らはしきを取捌すた鋪繡すの工案をもとめて捨るをすてざるの補となるへし詩に玉屑たまあり歌につく薬金やく屑の眼にさはる事ありともよしこれも又俳諧の色をかきあつめたる糸くずと今の都の染手より紫は江戸へあつらへける井筒屋か取次其角序ス

(この次が、如泉序、轍士序、後者に「元禄癸酉年夏日」とあり)

(酒竹文庫)

一一四 『ひるねの種』

雨やみ風しつかなりければ

名月や竹を定むる村雀

其角

(蕉門俳書集一)

一一五 『旅館日記』

川筋の関やはいくつけふの月

其角

一句のいま成おもひ出ニ被存候か小松川今戸中川市川なと申小関候にや

身にしむや宵暁の舟しめり

瓢箪はしは／＼かきのしけり哉 貞室

ヒヤウタンハと置たるハの字一字ニ題ス

瓢箪は只花落を命かな

山ふさくこなたおもてや初紅葉 キ角

十三夜

月影やこゝすみよしのつくだ嶋

素堂子の寿母七十あまり七としの秋七月七日にとことふくに万葉七種をもて題トす是につらなるもの七人この縁にふれてをの

／＼又七叟の齡にならはん

ふちはかな

蘭の香にはなひ待らん星のつま 其角

傾城の小歌はかなし九月尽 キ角

菊の香や瓶にもあまる水に迄

声かれて猿の齒白し降の月

年の市たれをよふらん羽織殿

行年をつはき吐きけり鏡とき

網代守大根盗人見付けり

曇りしかふらて彼岸の夕日影

高砂住の江の松を古今万葉のためしに引れしより塵うせすして連歌につたふ然るにこの松の枝葉百間ニあまりて諸木にことなる
けしき尤俳諧なるへし

蓬萊の松にたてはや曾根の松 其角

人のとかに祖父と孫 仙化

芋車の糸筒あまたにかけろひて 枳風

二

(略)

三

日の経タテや春の光の尋尺 同(介我)

鐘も霞めと襲束でつく キ角

陰に寝て泰山巫君や匂ふらん 仙化

四

(略)

五

万代と松にそ君をいはひ鶴と定家卿の真蹟うたかひなきにまかせて

けりかもは鶴になそらへ筆始 彫榮

御傘をひらく花に鶯 介我

竹馬に参内いそけ桃の宴 其角

重三に雪のふりけるまゝ

袖はそれさのゝわたりや雪の雛 其角

菓子盆にけし人形や桃の花

文は跡に梅さし出す使かな キ角

顔ぬくふ田子のもすそや五月雨

いかはかり田子のもすそやそほつらん
晴間もみえぬ比の五月雨 いせの大輔
日あたりや青葉に夏としられけり キ角
法体も鳥の下着や衣更

(俳書叢刊)

一一六 『名月集』

川筋のせき屋はいくつけふの月 其角

はらゝ子を千々にくたくやのちの月

法華書写のつゐて譬喩品

何者為火の文のこゝろを

何を火そ火宅につるゝ雉子の親 其角

逢旧友

なつかしき枝の割目や梅の花 其角

憶翁之客勞

夏瘦や能因ことに小食なり 其角

両国橋

千人か手を欄干や橋すゝみ

仲秋の月杜詩をよむ

類猿の句を再吟して

声かれて猿の齒白し峰の月

極月廿七日鏡磨まいりて

纒なる価とりて鏡とくを

行年を唾吐らん鏡磨

(酒竹文庫)

一一七 『後の旅集』

翁百ヶ日懐旧

墨の梅はるやむかしの昔かな

其角

つかみ豆腐にうかす青海苔

桃隣

小刀を懸て置たも長閑にて

嵐雪

仕つけの糸ののこるそて口

林巴

月の夜に門へかけ出す子を抱

介我

土引ならす駒ひきのみち

仙化

小車はかして咲もしほらしく

紫紅

本手の歌を諷ふわかれ端

雪

懐敷屏風の文を押まくり

隣

茶碗のつめにいれしきり藁

我

繼目とて御室の公を拜む也

巴

紅衣の医師の緩なる杖

角

段／＼に舟の歩ミを投わたす

化

柑類を積石花空のはち

紅

秋通る中山道はもの悲し

角

十日あまりも月をみぬ雨

隣

一年を花にあてたる遊事

我

背戸の畑を独活にあらさん

化

陽炎の酢粕に燃るむせくさし

角

洗濯物も墓所ちかき川

巴

ついで来る女乞食の子を泣せ

紅

切て牡丹に日を覆ッ笠

我

大手より見込の浅き浜の城

化

駕籠の上戸に酒屋あきるゝ

角

今日を拾ふた錢で暮すらん
冬の柳にどうよくなかせ
古萱を鳥の足に踏ぬぎて
笠置はものゝすこき水音
隙もなく月かき濁す紙の程
たまされて待人の夜寒さ
思ふには是をさへ噛ム栗楔^{トウシツ}
かるたの下絵見込睡まし
雅か機嫌もしらす飛かゝり
仏の事に金ふくろ解
ゆく春を近江の花の咄なり
琴に一手をつくす朧夜

百箇日興行

青柳にさらぬ古枝や百ヶ日
其涸池の芦は角組
鶯に三分坪の地をしめて
ようきりくともはる雇人
月の雨世間か寝れば晴あかり
背中の方に茶釜むし啼
同木の椎と茸とを取分て
師匠の国の便宜ゆかしき
空寒く日かな一日吹しこり
細工にぬりて壁の畦立^{ツバキ}
取置の貧乏かくしに不二の山

千川

雪 隣 我 雪 巴 化 角 雪 巴 隣 化 風 枳
桃 其 海 此 執 川 隣 動 筋 川
隣 角 動 筋 筆 隣 動 筋 川

酒て埒明舟の定客
 煩の様子は恋に極りて
 盆もやつはり浅黄帷子
 二人連たんのふしたる旅の月
 浪ひやゝかに歌仙貝とる
 松杉にかさなり合て神の花
 この若薄兎かくるゝ
 息災な庄屋の子共春めきて
 古金買の空とほけする
 彼是と小の晦日の師走也
 非時こしらへて梅の早咲
 風雅にて人とり立る信かな
 根のなき水の涌あかりつゝ
 寛文の曆て癡落にけり
 俎板なをす姫のがいはり
 夢に見た顔のやうなる人もきて
 稗に実の入湖の縁
 高田派へと肩いからかす暮の月
 三階蔵にあきの霜降
 老衰の手習するも見事也
 蓋とりかくる重箱の餅
 ぎかゝと南京寺の丸柱
 目をすりゝキヤウゴツに軽忽な咳
 花ちりて三日も立す時鳥
 みな借切の舟のとか也

隣 筋 動 川 筋 隣 筋 動 川 筋 隣 筋 動 川 筋 隣 筋 動 川 筋 隣 筋 動 川 筋 隣 筋 動 川 筋 隣 筋 動 川 筋 隣

尚々枯尾花の代物五部分僣落手仕候先達而いづゝやより進上申候由二重に罷成候而きの毒に奉存候併外に被遣候由先珍重仕候若御用にも無之候は、御かへし可被成候此方くるしからず候

(略)

其二 魚船の冬月

先評に其角か此木戸の冬月といかゝのよし高評に其角句と相似候処も候へとも又差別も有之候其上其角句よりは勝れ候故其儘御用のよし御尤に候重而沈吟仕候に於拙夫は其角句と強て差別無御座候此木戸も魚船の物のかはりたる斗にて其景情ともにおもひよる処同胸より出申候様に相見え候其上鏡のさゝれてと申言葉も平家物語以來其角か言葉かと被存候此段は管見にて申分に候へは強ては申かたく候又其角冬の月より勝候よし此は拙者はさほとにも不存候尤御句もよのつねならず候へとも此木戸の句に対して肩に及ましく奉存候併拙者心中に宿染の僻御座候故今更左様に存候か乍序申述候其角此句はしめ江戸よりさるみの集入句のため書來候に柴戸やと書下五文字を冬の月に可仕か夜の霜可然かと古翁にかゝひ来り候古翁下拙をめして其角柴の戸の句いかゝ存候やと御尋候故答て申候は柴戸に鏡のさゝれたる猶門前より見たる景色一風勢候へとも強て秀たる句とも不存候併此等之句入集に於て別儀有まじきよし申候翁被仰候はされはよさほとに其角か心を脳(マ)へきほと句にあらす然とも冬の月夜の霜猶置かね候て遠境相談に及候故不審におもひ其元へ聞候尤冬の月と定め撰集可然と被仰候其後さるみの集板出来の刻古翁大津に御座候而其角か冬の月の句頃日聞候へは此木戸といへる五文字也されはかのものを心をなやましたるも勿論也前五文字を改可申候たとひ板出来五十部百部摺立候ともかゝるめてたき秀逸一句も大切の事に候間其書引破候而板改め可申由被仰下候其書先凡兆宅へ相達し候か凡兆拜見申候凡兆この比古翁の其角を御引被成候とて邪氣をさしはさみ居候故古翁の書をかんとし其か冬の月の五文字此木戸と改來候書もあらまし出来可申候さしてかはりたる事にて無之に於ては前五文字のまゝに改ましと申候答て申候は凡兆は如何存しられ候や於拙夫は此木戸の五文字は只五文字の新きと謂のみならず一句のさひしさおもしろさ柴の戸に百倍したると覚えられ候いまた本も摺立ましく若摺立候共其分はさし置跡を直させ可申候由申候凡兆は強て差別なしと争論申候へとも古翁の御さしつの上は強て双論の私評に及はず五文字をあらため候其刻より此句を殊に秀たる句の様に存たる上古翁の賞美を承候而弥大切に存候句故今以て珍重仕候兼而如此に存たる句に付此度御句より秀たると承なし候哉又本より秀候哉再び御高評承度候

其三 白水の流も寒き落葉哉

其角評に一句よろしく候へとももの字はかれも此もに候へはやかましかるへしとて白水の寒き流に落葉と斧正申され候よし尤其角の

評一理相聞え候併下拙は又左様には不存候惣而てにをはの事舌長に申さんは憚入たる事に候へとも御存知のことくもの字に又も力も助もなと候よし承及候其外にも御さ候や其角申さるゝ処は又ものこゝろに聞かれ候と存候たとへは白水の流もさむし外の流もさむしといへる心花も紅葉もといへるもの字のこゝろに聞かれたるかと存候下拙か存寄之処はよのつねに見なれたる白水の流もけふはさむきといへるこゝろにてもの字を力にいたし白水の詮を立たる一句と存しられ候たとへは秋も来にけりといへるかことく外に來たる物もなく候へとも一句の力有か此もの一字にて白水の力を得候か初には拙者も白水の流の寒き事のみと存池のあさきとさして差別有まじきと存持と評仕候へも再吟仕候に冬深き宿の土も石も水たる上を行もあへず白水の流たるけしき誠におもひ当る事も候故此度浪化集に書加へ候又其元より白水の句其角もほめたるよし被仰聞候ニ故僻耳にもあらずと弥加入之句に仕置候又白水の寒き流とはつゝけかたく候はんかつゝき候とも白水の手柄は強てあるまじき様に存候いかゝ思召候や又集にいかゝ書し可申候や

其四 御命講やあたまの青き新比丘尼

先評にめてたき句なから中の七字かはり候はゝあはれなる方も出来へき御句也あはれ中七字御改被成間敷やと申候御答に此句は中の七字にて一句すはり候其角もそのとをりに評申されき又御命講さして憐なる物にても無之候よし御答御尤に候併拙者か存寄候処と聊たかひ候中の七字にて一句のすはりたる事其角評までもなく候然とも愚案は御命講にも候へ御忌御影供にも候へ仏縁の日をふれてそりこほしたる新比丘尼誠にめてたくなつかしき思召付と存候此新比丘尼一旦一夕のおもひにあらす千界万過幾イダクのかなしみうらみをむすひてかゝる姿となられけんと猶仏縁日に新比丘尼をおもひより給事を忝と存候しかるを中の七字にてたゞ只新比丘尼の頭の景色はかりに謂捨候はんよりは今少句案も候はゝ一等秀たる御句にも成候はんかと存したるにて候尤此比丘尼新老比丘尼にて且もおもしろからず候若き新比丘尼ならては一句立まじく候其処は又申様もあるへきか使下拙か申分は一句の惣意にかゝりたる句意に候但頭の青き新比丘尼といへる物の発句になるへしと一物の物の上にかゝりて御句案に候やさ候へは各別の争論に候又憐なるすちも出可申候と申候事は一句の言葉趣向を憐に被成候へと申にては無之候其一句の句からのしほりの出来るやうにと申たるにて候一句のしほりの出来る事は六穴見花雪風の風景又七情の句にもかきるましく候いつれの句にも有へき姿にて候たゞ一句の姿の事にて候此間重て高察所希候尤御一句もいやとは申されましく候猶其上一等可有句とそんしられ候

(略)

其七 狼のひよつと喰つゝ鉢扣き

此句之高評に狼に鉢扣きをおもひ寄たる事珍重たるへし然とも中の七字にて一句けかれ候此の七字ねはり候よし其角も同評猶此事下拙へ被仰聞候へと申候事且又中の七字を改めてしらて過けりとの御斧正旁以て忝奉存候併是又拙者存入候と少事かはり候先中の七字ねはり申候との事いかなる処かねはり候や心ねはり候や言葉にねはり候や且又読下し候て語路ねはり候や此処不落意底候心は鉢扣きの

衣に山野をめぐり候へはいつれの時にか孤狼(ころう)野干にはからず行逢候はんと与風存寄たる迄に候又夜々山野をめぐり候へはつるには狐狼の食にならんと憐みをととりて本となし句作仕候て外に句作有へきか只是はふと野干に逢へしと一偏におもひ出たるまゝをそこつの句を姿となし一興仕候さして心におもくれたる処を思案工夫にわたりたる事もなく句のまゝにて候又ひよつとくふへしといへる言葉もうけ給はらず候此は新古の論にて候へはねはりの高評にては有ましく候又詭下し申候か口にたまりもきこえず語路にねはりもきこえず候又言葉つかひにねちれて聞かたき事もたくみに重き事もきこえず候故高評別而不審仕候其角はいつれの処をねはりたる申候や但其角は翁の梅か香にのつと日の出るときこえしより深川(ふかがわ)伺公の門人すつとくはつとなときまゝ古翁の辞を似せ候古翁ののつとは古翁の言葉ぬしにてよるしく候其外の似せものめら何之分もなくそつとちつとなと申候としてしかり候よし兼而長崎之泥足はなし申候故下拙答て申候此は其角一扁の論に候其角上京候は一論いたし可申候と下拙か存入候処あらまし咄し候泥足此等之論耳に入へきにもあらす口をつくんで居候其後其角か上京之刻古翁の事に付二人とも不得閑暇候たゞ一夕嵐雪桃隣と四吟にて少俳諧仕候しかも其刻も枯尾花の清書にかゝり居候ほととの事にて終に一論に不及候此事下拙か誤もしらず候此度申述度候へとも事あまり端くれ故申残し候若此事を以て中七字ねはりたるとの事に候へは其角か此論取にたらず候外にねはりたる難も候やと別に稽古のため承度そんし候又御直しの事御尤に候へとも鉢扣きに対し候てしゆしやうなる体無心なる体或はさひしき体あはれなる風勢暫く遠慮可仕与存候

(略)

其九 応くといへとたゞくや雪の門

高評に出来のよし先珍重仕候且又其角評に誠の雪の門なりとの評誠に情なき事に候拙者不才の事に候へ共古翁の示教を受候事惣而十年よ情質不及人と申なからいかて雪の門の発句に雪の門ならぬ句をいたし候はんや此句はしめには

たゞかれてあくるまじれや雪の門

又

あくる間をききつゞけや雪の門

といたし候此とても雪の門はのかすましく候此句はしめは道綱の母のいかに久しき物とかはしるの和歌よりもひ付候へともつまる処此うたの魂に落候て発句の手柄すくなく殊にはしれやと理屈分別にいたり候事をいかに存し再び句作申候へ共猶応くとの句を存付候て句柄各別に存しかの句に直し候只拙者は此句のさひのつきたるやうにそんしられて此を自讃仕候凡古翁の御句軽きにも厚きにも狂乱なる句にも正実なる句にもやさしきにもむさき事にもなけても御句毎のさひてしほりの句たるを日比年ころ有かたしとも貴しとも存くらし候而常には何とそと心懸候此事拙者吾人ならず其角をはしめとして常に心懸られ候と相見え候此度枯尾花にも其角その事も書候又いれの書にか古翁の

うき世の果は皆こまち也

といへる句の評に自らも品かはるといへる恋の句に

(七五)
百花の中に雪の少将

と付たる事誠に口先のりつはにさひのなきを自ら口をしと其角も悔申候き其角をはしめ門人いつれか此をうらやみ申さぬもなく候へともさひの付たる句もまれ／＼に聞え候下拙も去年

花守や白きかしらをつきあはせ

古翁の評にさひ色あらはれ珍重のよし被仰下候此度たま／＼の一句何とやらんさひ色も見え候様に自分に存しられ候て自讃仕候事に御座候尾州の露川より其角つたえに聞候て驚候五文字さて／＼珍敷と申越し候五文字の賞美のみに逢申候も又おかしく候

(略)

(校本芭蕉全集・俳論篇)

一一九、『花かつみ』

鶯や身を逆のはつ音哉

其角

雀子に肌なつかしき娘かな

子規一二の橋の夜明かな

(学習院大学蔵本)

一二〇 杉風宛其角書簡

杉風様 其角

祝 商山

はま弓や当時紅裏四天王 其角

かうら御免

大くほもくのかみ

牧野備後のかみ

御年成とて

井戸つしまのかみ

下條長兵衛

かたきり石州のちやくし

三代四代つかへたまふ人

当時四人の高老を祝申候是

は私へ御恩被下候方へきけ

ん取也

(『蕉影余韻』)

一一一 『ありそ海となみ山』(浪化集上・下)

奈良の鹿二句 木辻に亘りて

門立のたもとくはゆる小鹿かな

番の火を便にねるや鹿のなり

なか月の末大井川をわたりて

いつしかに稲を干瀬や大井川

河鮎洗ふ水のにこりや下川原

東叡山

八つ過の山のさくらや一しつみ

八雲たつ此嶮嶮を雲のみね

刀奈美山引

頭巾とも襟巻ともつかぬはなむけせしは霜月十三日の夜也そのよはことにさむかりしかとも嵐雪に妹ともいはせず桃隣に疝氣とも逃さず落柿舎をたゝいて入しより先たき付る酒の間ともに本情をあらはすたのしみ也四子一胸に成て芭蕉翁の昔を泣みわらひみ嵯峨の咄は幻住庵へとんで深川をわたれば清滝川の塵なき月を思ひ猿蓑の評は芝居の沙汰にうつり恋をは一句にてこそ捨といへは早く傾治のたはふれに事よせて人事人情かはるゝの転動の上にも十人の酬和と云し九人か意地をたてしもたゝ翁一人を眼にし口にし横行の蟹の逃穴をふんて時のさかなにせんと咄ししこるに八つの鐘耳ひそかにして鉢たゝきのしはふき来る是を嵐雪か馳走にと十銭をなけて千声のひさこをならさしむ

千鳥なく鴨川こえて鉢たゝき 其角

今少年寄見たし鉢たゞき 嵐雪

ひやうたんは手作なるへし鉢たゞき 桃隣

旅人の馳走に嬉しはちたゞき 去来

されは堅固のつとめ哉とその跡をしたふて明れは十四日の明ほのに四子北野へまふて侍り輪藏を廻りて回廊によれば雪の風はな松を
はらつて羽織にしめりかほそき梅にかゝるさへ田楽の匂ひになりて一盃はとすゝむる桃隣か顔色ことに青し嵐雪か奉納の一句に十面
するを時うつすまで絵馬をなかめて待かねたりとかくする中にかたはらに腰掛所得て爰に都の名残をおしめりむかし芭蕉翁北越の旅
寝にありそ海の吟あり浪化君此句より信仰の一集をおほしめし立ありて去来着頭をかうむるなり江戸門葉のものにもかねて発句まい
らすへきよしを催しぬる事を語り出たとみにとなみ山のおもてを起しぬ往年落柿舎にて夜ひそかに翁をむかへ向対の盃ありて門人の
かためをなさせ給ふ御こゝろさしの目出度覚えぬれは予も一かたにおもひ侍るよしを約して心かたむかぬ等をぬきんて撰集の余力と
しこしのとなみに雁陣をたて同じく箱柳の塵をふるつて下知する事をしかいふのみ

となみ山の表

其角

こからしや沖より寒き山のきれ 浪化

高きところ 生るふゆ麦 嵐雪

来春の用意するらん木具提て 桃隣

家は見事にたちそろひけり 去来

山鼻にしる人持てはしりよる 角

きさみなますに入ることんにやく 化代

萩の花小刀ぬいて下へをり 雪

はこに鼠のかゝるあさ露 隣

有明の汐に筏をおしくつし 来

番羽織着ていきるくみつき

冬

此家か不破の関屋か雪の中
初雪に真葛か原のめかけ哉
晋子
すり針や今ふるやうにいつの雪
はらはすに雪の風鈴の音もなし
介我
初雪や妒次に女の雀彈
紫紅
かくれ家や片耳かけて角頭巾
専吟

春

やふ入やひとつはあたるうらや算
晋子
齒につかぬ子こもりも哉花の時
岩翁
物陰や田螺のほる種たはら
尺草
彼岸にて彼岸桜のちりにけり
彫棠
春の野や木瓜は蕤の敷合せ
沾徳
やふ入や朧月夜の酒の酔
専吟

夏

卯の花に芦毛の馬の夜明かな
許六
早乙女の手てせくものよ川の支
彫棠
飛石の間や牡丹の花のかけ
介我
旅立に火縄やりけり門すゝみ
岩翁
涼しさや帆に船頭のちらしかみ
晋子
涼み舟鵜はかしましと沖へ行
枳風

秋

星合や離別の中をわひて見ん
山蜂
暁を引板屋にかはる妻もかな
秋色女
秋のくれはり合もなし舟遊山
紫紅
寝た家の燈籠哀に月夜哉
未陌

水の蛛一葉にちかくおよき寄晋子
雁の腹見送る空や舟の上同

元禄猪頭勇進之日

其角

去来丈

演説し給へ

(酒竹文庫)

二二 『やはき堤』

昼過の山のさくらや一しつみ

江戸 其角

たのみてや竹に生るゝ蝸牛

其角

山畑の芋掘あとに伏猪かな

炭屑にいやしからさる木葉哉

熱田にしろ人ありて此面を状に

書入てこしぬ幸として追加ス

あつたは濁とも浦ともいへり

こゝに一夜の眺望

其角

宵の帆をあかつきも見ん冬の月

衛の羽の残る砂原

鷗伯

鉄炮のさきに大根を打かけて

ひや酒のめは後酔のする

湘水

奉公の内に仕ためて二枚敷

またわらはるゝ我ちから瘤

左次

村次に觸状もちて走る也

素覽

雨にもならず日の出る暮

野幽

(学習院大学蔵本)

(芭蕉終焉前後の模様を叙して) (元禄七年十月)

十一日

此暮相に晋子幸に來りて今夜の伽にくはよりけるもいとちぎり深き事なるへし

(略)

十八日 (元禄七年十月)

所願忌

湘南北の門人おのゝ義仲寺に會して無縫塔を造立す面には芭蕉翁の三字をしるし背には年月日時なり塚の東隅に芭蕉一本を植て世の人に冬夏の盛衰をしめすとなり此日百韻あり略之

なきからを笠にかくすや枯尾花

其角

温石さめてみな氷る声

支考

行燈の外よりしらむ海山に

丈草

乃至

若鳥のあやなき音にも郭公

其角

三月四日武江にいたるきのふは桃花の節なりとて

鶏の獅子にはたらく逆毛哉

其角

つとめての日なるへし其角桃隣介我上野の花みむ

とていさなひ行けるに院の風流なと見ありきて

椽からはこなた思ふや花の庭

同

といへるはいかなる時のほつ句にか侍らん今おもひ

出るなとさゝめかし渡りてその暮は紫亭にこみ入
酒のみてかへり侍る

素堂亭

十日菊

蓮池の主翁又菊をあいすきのふは竜山の宴をひらきけふはその酒のあまりをすゝめて狂吟のたはふれとなすなを思ふ明年誰か
すこやかならん事を
はせを

いさよひのいつれか今朝に残る菊

残菊はまことの菊の終りかな

咲事もさのみいそかし宿の菊

昨日より朝露ふかし菊島

かくれ家やよめなの中に残る菊

此客を十日の菊の亭主あり

さか折のにるはりの菊とうたはははや

よには九の夜日は十日といへる事をふるき連歌

師のつたへしを此あしたしみを払ひて申侍る

(酒竹文庫)

素堂

其角

嵐雪

友五

越人

路通

一一四 『若葉集』

深川長慶寺に往事をおもふ

しくるゝや爰も舟路を墓参り

其角

(綿屋文庫)

一二五 「如行宛」其角書簡

尚々一周忌之編は嵐雪にまかせ候三年は秋米木曾塚へ罷登り候と存候めつらしう御歳且(マ)ともにて可本年当御芳心候 以上

翁百ヶ日之追悼到来委細に熟覽誠に厚固之懐愁尤成御志ともに感吟無申斗候善々翁之残情に叶申事共に御さ候卷末之梅の句は実に入
候へ共当座めかしく詠入候き御働は兎角不被申候路通とも能御加入候是彼に付翁之余潤之光沢に候へは此坊飯念の罪をやめ候てもと

の衣に帰候半こそ道の濟度と存候まゝ其元へ心寄候て漸々に私眉致候て落にきの名も人は語るましくと珍重に被存候十月十二日は当地心々に追善執行候深川長慶寺に移墓

しくるゝや爰も舟路をはか参

晋子

と申斗候相互に別条無親語候へ共御集にめて候て乍早々に申及候

(飯田『蕉門俳人書簡集』)

一一六 『鳥羽蓮華』

八つ過の山のさくらや一しづみ

其角

(綿屋文庫)

一一七 宝井晋子消息連句

風光吟

水鼻にくさめ也けり菊紅葉

十二日翁一周忌ふか川長慶寺にて

しくるゝや爰も船路を墓まいり

戒講といふ題にて

俎に小判なけけり多ひす講

付合此比の席にて

風雲に落るやうなる星の数

海へなげ込舟のいさかひ

かけはとふ也一たきの伽羅

夜着を着てあるいてみたる土用干

此文によめぬ所か一字あり

昼のお人歟茶屋の俯

なと申し候

晋子

中村闍指様

(『俳文芸』二四・今泉「宝井晋子連句消息」)

一二八 『渡鳥』

禾村

稻こくや藪ヒコトを握る藁の中

其角

(竹冷文庫)

一二九 『やへむくら』

初雪に真葛メカケかはらの妾哉

其角

(学習院大学蔵本)

一三〇 『住吉物語』

炭やぎや臚シの清水鼻をみる

其角

江戸

(学習院大学蔵本)

一三一 『随門記』

遙見人家花有入

不論貴賤与親疎

是に仍而

梅か香や乞食の家も覗かるゝ

晋子

乞食とせめ上たる所のそくと手際尽したる所句案第一成へし

東坡詩に玉手千人枕と有り

千人か手を欄干や橋すゝみ

晋子

是两国橋上の吟也

翁の旅つかれ病身をおもひやりて

夢瘦や能因ことに小食なる

晋子

撰集抄袋草紙のあらましまかせ侍る夏瘦と小食との取合せ工案有へし

応くといへとたゞくや雪の門

丈草評に曰此句不易の場を蹈て流行のたゞ中を得たり奇妙なと云々支考笑て曰いかなる工夫を以てかゝるやすき筋には入けるやと云々曲翠曰只奇妙の句なり正秀戯曰作者を不聞此句善悪を不可謂此句可作人をおほへす当時雪の句閉口其角判曰まことに雪の門かな五文字勝れたりと去来曰情なき誉やうなり

(校本芭蕉全集・俳論篇)